

## 呼吸器病学；今日までの軌跡と確かなる未来予想図

結核予防会結核研究所

企画主幹 吉山 崇

2018年4月27日から29日まで、大阪国際会議場と隣のリーガロイヤルホテル大阪で第58回日本呼吸器学会学術講演会が、平田一人会長のもと行われました。呼吸器学会は、呼吸器内科、呼吸器外科、病理科、放射線科など12,000人の会員を擁する呼吸器疾患の学術団体で、今回のテーマは、「呼吸器病学；今日までの軌跡と確かなる未来予想図」でした。現在が変動の時代であるため、高齢化、疾病構造の変化、分子工学の進展、新たな治療の導入などが様々な疾患に起こっており、呼吸器病学の前途も混沌としている、という背景でのテーマです。

山中伸弥京都大学教授のiPS細胞の話、招請公演は外国から気管支喘息、COPD、感染症（真菌）、腫瘍分野で4名、国際シンポジウムは気管支喘息、COPD、間質性肺炎、肺がん、感染症（非結核性抗酸菌症）のテーマで行われました。呼吸器学会では若手の医師の活躍を促すために、若手シンポジウムや留学の勧め、教育講演を行う一方、呼吸器病学を長年引っ張ってこられた方々による「呼吸器病学のパイオニアから」というセッションが設けられ、結核予防会の工藤翔二理事長も、びまん性肺疾患の話がされました。またこの学会では、各専門分野の学会と連携して、日本呼吸ケア・リハビリテーション学会、日本アレルギー学会、日本集中治療医学会、日本呼吸器内視鏡学会、日本リウマチ学会、日本サルコイドーシス/肉芽腫性疾患学会、日本呼吸器外科学会及び日本結核病学会との共同企画が行われました。結核病学会との共同企画は「知らなきゃ恥ずかしい結核の基礎知識」と題して、結核の診断、治療、インターフェロン $\gamma$ 遊離試験と潜在性結核感染症の治療、結核対策における医療機関と保健所の連携の演題でシンポジウムが行われました。初日の8:30からでしたが、会場はほぼ満席で、特に質疑応答が多かったのが千葉大学猪狩英俊先生のインターフェロン $\gamma$ 遊離試験と潜在性結核感染症の治療についての講演で、免疫抑制宿主、免疫抑制治療における潜在性結核感染治療、院内感染対策として職場で行った検査

結果の陽性時の対応など呼吸器疾患の臨床で遭遇することの多い項目についての質問が多くありました。

20のミニシンポジウムの一つが結核・非結核性抗酸菌症についてで、非結核性抗酸菌症4題と結核1題、ポスターセッションは全体で1,148演題、うち結核症が14演題、非結核性抗酸菌症で32演題（1演題は結核と非結核性抗酸菌症の合併について）でした。また、呼吸器学会では18の英語のポスターセッションがあり、そのトピックの一つが結核で、フィリピンから膿胸の症例報告1題、インドネシアから多施設共同研究で4題、日本から職員IGRA検査について1題の報告がありました。また、非結核性抗酸菌、真菌、細菌感染の英語ポスターセッションでは、非結核性抗酸菌症についての2題は日本からでした。

結核予防会は禁煙活動にも積極的ですが、呼吸器学会も同様で、今回の集会でもスモークフリー推進の現状と課題という特別報告のセッションがあり、非燃焼加熱タバコ、電子タバコに対する2017年11月の呼吸器学会の使用を推奨しない、すべての飲食店、公共の場所、公共交通機関での使用を禁止すべきというステートメントについての報告がありました。

呼吸器学会は、結核を専門としない呼吸器疾患関係者が多く集まる場ですが、今回の猪狩先生の講演への質問の多さは、結核の診断及び診断の場での院内感染対策を担っているのは、呼吸器学会に来る人々であることを反映しており、共に結核対策を担っていく必要があります。🐷